

知るということは自己の中に自己を映すことである
- 『自覚に於ける直観と反省』における「無」の登場-

板橋勇仁 (立正大学)

西田幾多郎は自らの独創的な論理を「場所的論理」と呼んでいる。この論理が最初に明確に提示されたのは論文「場所」およびそれを含む『働くものから見るものへ』(1927)の「後編」である。この「後編」の思想の特徴の一つは、私見では「知るということは自己の中に自己を映すことである」とみなす点にある。このことは、西田哲学を特定の思想的伝統の枠組みに閉じ込めて理解することを避け、西田哲学の可能性や意義を広く検討してゆこうとする時、大きな手がかりになると思われる。ここで問題となるのは、いっさいの知を「自己の中に自己を映すこと」として捉えるということは何を意味するか、そしてその思考がいかなる意図ないし方法に基づいているものかということである。後者なしにただ前者のみを明らかにしても、西田哲学を世界における他の哲学思想との連関の中に開き位置づけ直すことはできないであろう。

このような問題意識に立つなら、我々は『働くものから見るものへ』のみではなく、というよりもむしろそれに先立つ『自覚に於ける直観と反省』(1917)こそを注意深く検討しなければならない。西田はこの著作で多様な西欧哲学を咀嚼しながら「知るということは自己の中に自己を映すことである」という着想にはじめて至った。そのために試行錯誤を繰り返すいわばその「仕事場」において、我々は西田の意図や方法をより明確につかむことができる。本発表では、従来その難渋さゆえにどちらかと言えば敬遠される『自覚に於ける直観と反省』を主として考察し、最後にそれと『働くものから見るものへ』との連関を一瞥するという仕方で、上記の問題に取り組んでいきたい。

なおこの際に鍵概念となるのは、この『自覚に於ける直観と反省』において初めて西田哲学の主要概念となった「無」である。西田の言う「無」の概念がどのような内実と方法を伴って提出されているのかというのは一見ありふれたテーマのように思われるが、報告者からすればむしろそれが精確を期して取り組まれたケースは少ないように思われる。従来とは異なり、西田が H. CohenやA. Schopenhauerの思想を咀嚼しながらこの概念を提出したことの意義をクローズアップすることで、「知るということは自己の中に自己を映すことである」という思考の意義を西田哲学から開いて位置づけたい。